



くようとう 第2章 津波供養塔をたずねて

— 津波被害の記録 —

元禄地震では、房総半島の南部から太平洋沿岸にかけて津波が押し寄せました。この津波で犠牲になった人たちの霊を慰めるための供養塔や墓碑、位牌、そして津波にまつわる伝承が房総半島の各地に残っています。これらは、津波の惨状を伝えるだけでなく、私たちに災害への警戒を忘れてはいけないことを語りかけています。

第2章では、津波供養塔や言伝えをもとに、津波の記録をたどっていきます。



7. 元禄地震津波で 2,000 人以上の溺死者の記録が残る九十九里海岸

津波供養塔と言伝え



8. 元禄津波供養塔

(茂原市茂原 ^{じゅせん} 鷲山寺 茂原市指定有形文化財)

この碑は、茂原公園の横にある鷲山寺に建立されており、九十九里浜南部地域の村々における元禄津波の犠牲者を供養しています。

碑の右側面には「元禄十六癸未歳十一月廿二日夜丑刻大地震東海激浪溺死都合二千百五拾余人死亡・・・」とあり、2,150 人あまりが津波の犠牲者になったと刻まれています。



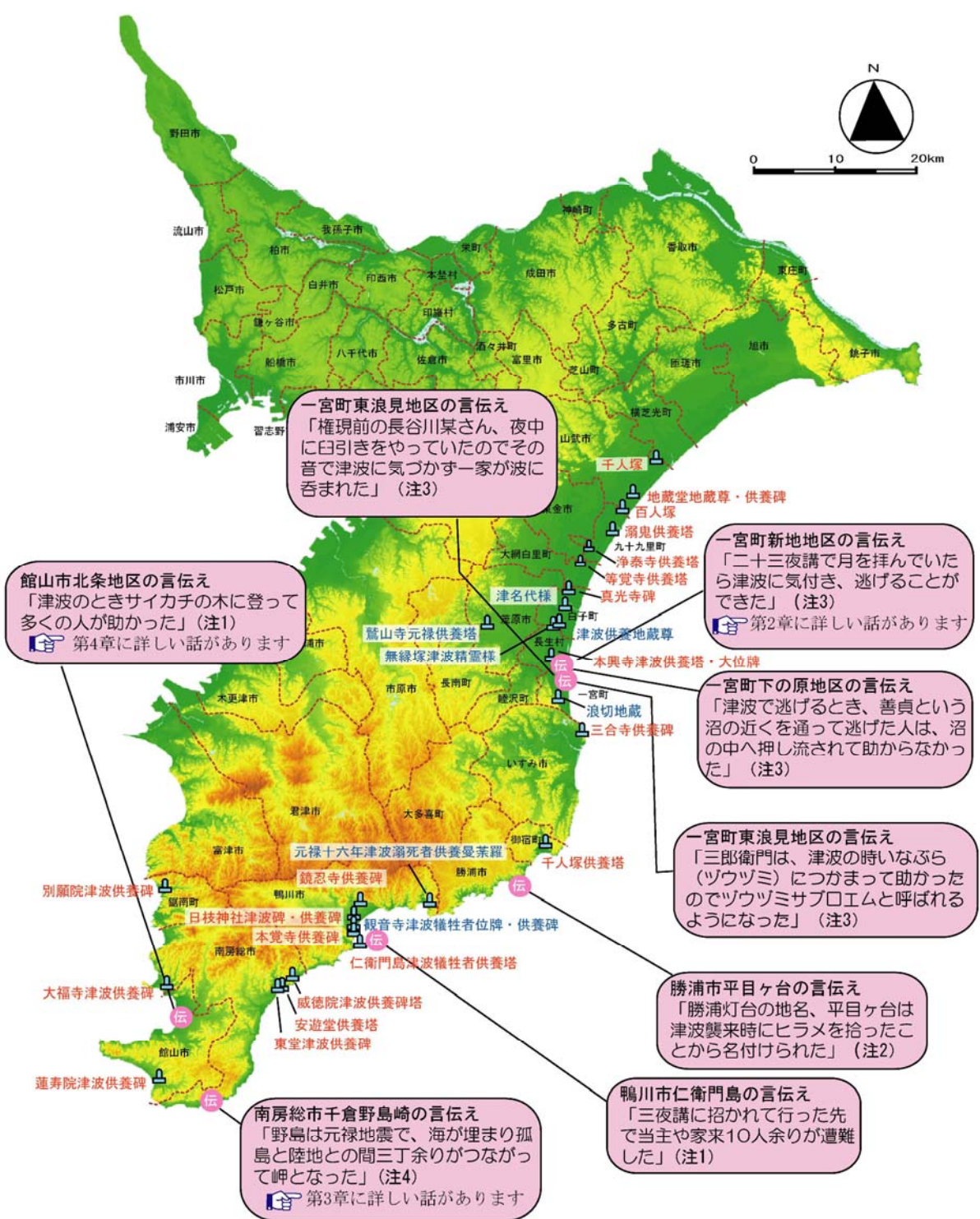
9. 無縁塚津波精霊様 (白子町幸治 白子町指定文化財)

元禄津波犠牲者 360 人余りが埋葬された所で、白子町指定文化財です。地震から 95 年後の 1798 年 (寛政 10 年) に幸治村が建立した塔です。



10. 津波代様 (白子町古所 白子町指定文化財)

元禄津波犠牲者を葬った場所に、13 回忌 (正徳 5 年 11 月 23 日) の時建立された供養碑で、白子町指定文化財です。横の説明看板には、白子町での津波溺死者は 1,115 名を数えるとあります。今でも地元の人たちが線香や花を供えています。



供養塔・供養碑・位牌など
青文字は本文中で写真を掲載しているものを示します。

元禄地震にまつわる言伝え

(注1) 「南房総における元禄16年(1703年)津波供養碑—元禄津波の波高と対象地震津波の比較—」(羽鳥、1976)より
(注2) 「元禄地震—一九十九里浜大津波の記録—」(千葉県消防地震防災課、1976)より
(注3) 「一宮町史」(一宮町史編集委員会、1964)より
(注4) 「長生郷土漫録」(林天然、1953)より

11. 元禄津波の供養塔や碑、言伝えの分布図



12. 波切地蔵(一宮町東浪見)

東浪見地区は元禄地震だけではなく、延宝5年の地震でも津波被害がありました。大津波がこの地蔵のところでとまった、という言伝えがあります。現在は国道128号線沿いにあり、海岸線から1.5kmほど離れています。



13. 誕生寺の津波犠牲者供養曼荼羅(鴨川市小湊)

この曼荼羅には、左幅に243名、右幅に164名計407名の元禄津波犠牲者となった俗名と戒名が住所とともに記されています。鴨川市(旧天津小湊町)の誕生寺では、現在も毎月22日に元禄地震の津波で犠牲になった人たちを供養し、この曼荼羅を掲げています。



こんな話もあるよ

生死を分けた二十三夜講

*一宮町新地地区の話

元禄16年11月22日の夜、集落の人たちは二十三夜講の集まりを行い、月の出を待って拜んで帰ろうとした。いったん出た月が晴れているのに見えなくなってしまう。人々は月が見えなくなったのは津波が沖に来ているせいだと判断し、一同大急ぎで帰宅し、寝ていた家人を起こして避難した。そのため、この二十三夜講に出ていた人の家では死人が出なかったという。

「一宮町史」(一宮町史編纂委員会、1964)より



14. 現在の新地地区の景観

*細谷家の悲劇 白子町妙法寺に供養塔を建立した細谷氏の話

津波のあった元禄16年11月23日、三夜講(二十三夜講のこと)の宿であった細谷家では、隣家十数人集まり講を行っていた時に大津波に襲われたと口伝えられている。細谷家は当時海岸まで約500~600mほどのところにあり、しかも当時屋敷を土手で回してあるため、近隣の人々も安全な逃げ場所を求めて細谷家に集まった。そして門を閉じた結果、屋敷内では海水で満ち人々は逃げ場を失い最悪な事態となり多くの死者を出した。

今日でも津波の事は話題に上り、「故人の霊を慰めるため、また後世へ津波の恐ろしさを伝えるために妙法寺へ供養碑と地蔵尊を建立した。」という。

「山武・長生郡における元禄地震調査」(古山、1982)より



【二十三夜講】

十五夜と並ぶ月待ち行事の一つです。月が深夜0時頃昇る旧暦22日の夜から23日にかけて、「講中」と称する仲間が集まり、飲食を共にしたあと、経などを唱えて、真夜中に東から昇る月を拝み悪霊を追い払うという宗教行事で、江戸時代に全国的に広まりました。三夜講とも呼ばれています。この夜、月待ちをすれば願い事がかなうともいわれています。(参考：岩波書店広辞苑)

鴨川市前原地区の津波被害

鴨川は「鴨川沿革史」（「旧鴨川町誌」）によれば、元禄地震前までは、「前原には600軒以上の町家があり、江戸廻し船30隻、イワシ内船150隻……ことのほか繁盛していた」とあり、当時、漁業、特に干鰯の生産で相当繁栄していたと思われます。



17. 史料から想定される当時の津波浸水域と史料の位置

水色の範囲が津波で浸水したと想定される範囲を示しています。「元禄16年(1703年)南房総における津波供養碑」(羽鳥、1976)をもとに作図。背景の地図は国土地理院の電子国土を利用。

大きな被害を受けたのでしょうか？この理由を明らかにすることは、防災の上で重要な意味があります。「鴨川市における元禄地震史料と津波災害」(古山、1988)には、元禄地震の被害が大きくなった理由を次のように述べてあります。

- ・河口の背後に分布している湿地帯・沼地がかなり内陸まで入り込んでいたこと。
- ・干鰯生産の最盛期にあり、多くの漁民が集まって集落を形成していたこと。
- ・真冬の深夜に津波が襲来したため、逃げ遅れ、暗闇で方向感覚を失ったこと。

特に地形条件による被害は津波対策上注目すべき点です。



18. 津波避難丘（鴨川市前原）

この丘は慶長9年（慶長地震）の大津波の教訓に住民が築いたものです。元禄地震の時、この丘に逃げ込んだ人は助かったという言伝えがあります。丘の上には日枝神社のご神体がまつられているほか、元禄津波犠牲者の供養碑が多数残っています。



16. 現在の鴨川市前原地区の景観

しかし、元禄地震の津波は、前原地区の繁栄に相当な打撃を与えました。牧野家文書「児安惣次左衛門万覚書写」には「前原一村ことごとく流れ、溺死千三百人、流失千軒」とあり、1,000世帯近くの家屋が流され、集落がほぼ全滅に近いほどの被害を受けたといわれています。特に「鴨川沿革史」によると馬場集落は壊滅状態となり、その後横渚台に移住したともいわれています。

前原地区では、なぜこれほどまでに大



19. 観音寺（鴨川市横渚）

観音寺には、下に示した元禄津波位牌のほか、津波犠牲者の供養塔や墓碑が多数残っています。



20. 元禄津波位牌

（鴨川市横渚 観音寺蔵）

鴨川市横渚の観音寺に保存されている位牌で、元禄地震の津波による犠牲者を供養しています。表には145名の犠牲者の戒名が記されており、その多くが女性と子供です。